
ボクは夢を見る

洗井 あい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクは夢を見る

【Zコード】

Z2146A

【作者名】

洗井 あい

【あらすじ】

高校生のリョウと大学生のハルキは付き合い始めて、まだ1ヶ月。相思相愛な二人だけど、最近ちょっととれ違いの日々が続けていた。ハルキの事で悶々と考え込むリョウの視界に入ったのは、進学クラスの優等生ミナミ。気になっていた彼女と友だちなつたのは良かつたけれど、その彼女の本当の素顔を知つて驚愕する。

ボクユメ1

夢だ。

絶対に、コレは夢。

それも、絶対フツーの夢だから、大丈夫だつて、絶対、そんなことあるわけ無いから・・・

夢の中で、ハツキリと自分の意識を直覚しながら、教室の机で涙している、自分に言い聞かせる。

しかも、授業中だぜ、オイ！古典かよお・・・・・イツだつけ、古典・・

・ああ、だからコレはただの夢だから大丈夫、心配すんな。

でも・・・夢でも、あんまりだよ、授業中にこんなの。

いきなり鳴ったケイタイのバイブ。

メール・・・ハルキからだ。自分からメールなんてしないのに、昨日のがよっぽど良かつたのかなあ。

タベのHを思い出してニヤケながら、その無題のメールを開けた。

『女できたから、リョウとは別れる。』

「え！ なに、「コレ！」あ・・・なんか、コレ夢だ、叫んだのに誰一人気づかない・・・だから、いつものように夢だつてスグにわかつたけど、スゲーショックなんですけど。

マジ？ ハルキ、いくら夢の中でも自己中すぎない？いや、現実のハルキはもつと自己中だな。

夢の中の授業は淡々と続いていて、クラスのヤツ等誰一人としてコレの様子に気づいていない。

そうだよ、夢だもん。

今ココで大泣きしたつて、誰も気が付かないし、恥ずかしくもなからう。

泣いちゃえ！

『ハルキのバカヤロー、酷いよメールで別れ話なんて、オマエなんか大嫌い！

ばかばかばかーーー、大好きなのにーーーもつともつとこつぱーーー
緒にいたいのにーーー。』

泣いて泣いて、鼻水垂らして激しく叫んでんのにーーーやっぱ、誰も気が付かない。

それはそれで、ちょっと悲しいかもーーー「どうしたの?」って声も無しかよ。

あーあ、なんか泣き疲れちゃった。

夢だつてわかつてたつて、心の傷は相当なものだ。本当にハルキからこんなメール来たら、死んじゃうかもしない。オレは大きなため息と共に、机に突っ伏していた。

窓の外に広がる暗い雨雲・・・オレの心を表現してんだな、きっと。あと少しで大粒の雨が降つてくんだろう。無理矢理起きちゃおうかな、でも、そしたら目覚めが悪すぎて一日憂鬱になっちゃうもんな。少しはハッピーに転換していいでほし!。

『ねー、どうした、コネちゃん。飼い主に捨てられちゃった?』え?急な声に顔を上げると、どこかで見たことのある、見覚えのある・・・澄んだアーモンド形の瞳が、目深にかぶつたキャップの下から覗いていた。だ、誰だつけ・・・

『きっと雨が降つてくる。ココにいたら濡れちやうよ。良かつたらウチに来ない?』

どこで聞いたんだろう、聞き覚えのある透明感のある涼やかな声。たぶん、学校のヤツ?でも、こんなカツコイイヤツいたつけ?そんなヤツいたら、見逃すはずないしつつ、その手がオレの身体を持ち上げ、その腕に優しく抱いた。

ん?オレ、仔猫になつてる?「あんた、ダレ?」つて一生懸命叫んでも『ミヤーミヤー』鳴いてるだけなんだもん。本当、夢つてオモロイ。落ちないように踏ん張つたら、オレの爪がその人の肌に少し食い込んだ。「ゴメン、痛かったよね。」つて謝つてもネコ語だけど。

『ん?大丈夫、このくらい。』

そう言って、その人はオレの頭を何度も撫でたんだ。

ボクユメ2

「ふう————」

なーんかなあ、なんだかなあ・・・最近、ハルキ冷たいんだよなあ。ゼミで忙しいのわかつてんだけど、メールくらい返信してくれたついいじやん。自己中ハルキだからしょーがないけども、この前の夢みたいになつたらヤだし。でも、なんか心配でさあ、休み時間の度にメールチェックしたりする自分、ああ、けなげすぎる。

自分でもわかんないけど、オレの好きになつちゃう人つて、最近はみんなオトコ。もちろん、オンナとだつて付き合つたことはあるけど・・・最後まで、シタことはない。オンナとスルつてイイみたいなんだけど、生憎そのチャンスがまだめぐつてこないみたい。ま、そのうちに思つてんだけね。

だからオレの恋愛つて、相手が相手だけに、だいたいが苦しい気持ちを抱えるわけだけど・・・3日前に見た、あのリアルな夢が脳裏に焼付いて、精神状態ヤバめなわけ。

あの夢の続き、残念なことに覚えてないんだ。ネコになつて抱き上げられて、たぶん連れ去られたんだろうな。の人、本当にいたらイイのに・・・「はあ————」ため息と一緒に机に突つ伏した。

窓の外は、青空だ。オレの心は曇り空つて感じなのにな。
3階の教室の窓から見えるといつたら、空、3階建ての体育館の2階フロア、見下ろすとレンガで敷き詰められた中庭。それだけ・・・敷地が狭い街中の高校だから、しかたないよな。体育館をグルリと取り囲むように校舎が4棟建っていた。お陰で、グランドが存在しないから・・・体育嫌いなオレにはありがたい。

良かつた、生物の時間で。この先生、テストで点さえとれば授業中の態度はどうでもいいみたいな先生だから。オレがこうやつて寝た振りして外を眺めてたつて、無関心だもん。

ふと見た体育館、女子クラスがダンスしてる・・・ウチの学校、

前は女子高だつたんだよね。だから、女子のが圧倒的に人数が多い。部活も女子のが全国行つてゐるし、あ、エイコだ・・・つてことは国立コースのいけ好かないクラスか・・・普通科を見下してゐる、ヤなクラス。

でも、1人だけあのクラスなのに毛色の違つた子がいたつけ。ほら、体育館のガラス窓に寄りかかつてゐる子。名前、なんだつけ・・・えつと、そう都築さん。けつこー、目立つんだよね、背が高くて、キレイで、それでなんかクールな感じだから。彼氏、いんのかなあ。あの子だつたら、シテもいいよなあ・・・なんて、許してハルキ。あ、エイコ、意味ありげにニヤニヤしながら、カノジョに近寄つてきた。あの女、ちょームカつくんだよなあ、お嬢様だかなんだか知らないけど、ホント、バカ女の部類ネ。

その一人の様子を観察していたオレは、ちょっと意外な方向性にピクリと反応してゐた。どう見たつて、なんかエイコのヤツ、都築さんに氣がある素振りつていうか、どうなのその雰囲気。ペツタリと寄り添つて感じですかねえ・・・あいつ、そっち系だつたんか？都築さんの少し迷惑そうな横顔が、こつからでもハツキリと見て取れた。またマイペース発揮してんのか、エイコのヤツ。カノジョの腕を引っ張つて無理矢理床に座らせると、その耳元で何かをささやいていた、今にも唇がその耳に口付けでもしそうな程に顔を寄せて・・・

けれどカノジョは迷惑そうに立ち上がると、フロアを背に、こつちの、オレの校舎の方を向いて、うんざりした顔をしてゐた。それでも執拗にカノジョの腕に手を絡めるエイコの品の無い態度が、盗み見てるコツチも不愉快にさせる。いい加減、諦めろつて、脈ないんだから・・・オレは苦笑してしまう。

無関心を決め込んだのか、それとも話すのもイヤなのか、カノジョはエイコを無視してゐた。エイコの形相がみるみる強張つて、怒りがその態度にも表れ始めると、やつと大きくため息をついて、真っ直ぐにエイコの瞳を見つめていた。その途端、エイコはヘナヘナ

と力が抜けてしまつたようで、だらしなくカノジョにしな垂れた。

疲れたように空を仰ぎ見たカノジョが・・・戻した・・・視線の先に・・・オレが・・・いた。

ヤベ、見つかった！

慌てて視線を反らしたけれど、カノジョの視線を後頭部に強く感じていた。

その視線の痛さにいたたまれず、もう一度、おずおずとカノジョに視線を戻す・・・

するとカノジョは、愉快そうにニヤリと笑つたんだ。

ボクユメ3

うわあー、すげー気まずい。

何がつて、盗み見てたのバレバレじゃん。オレが何組かバレバレだし、後で呼び出しどか無いことを祈るつて感じなんだけど・・・待てよ、別に自分が悪い事してたわけでなし、何ビビッてんのよ。相手、オンナだし。挙げるとしたら、カノジョの存在意識してた自分の浮気心つてところ。

それにしてもビックリだよなー、エイコとそんな関係なんだ、カノジョ。

趣味悪いぞ、オイ。

オレは、むず痒くなつた頭をボリボリと搔いた。

「田辺えー、昼、上で食べね？みんな行くつて。」

「あー、行く行く。」

5分早く終わった、生物の授業。クラスの友だちに誘われて、ガーデニングされた屋上へと向かった。

各校舎の屋上を緑化して、生徒に開放してくれてるといふ。ま、高く張られたフェンスはいたしかたない。

他のクラスの授業は続いていたから、オレらは流水脇の一一番いい場所に陣取る事ができた。

「なんか、金魚、デカクなつてね？」

「うわ、デカ！みんなエサやりすぎなんじゃね？」

10センチ位に大きくなつていた金魚は、オレらが祭りの時に金魚すくいで取つて来たやつだった。

案外、ウチのクラスつて仲良かつたりすんだよな。みんなで祭り行つたり、映画行つたり、バーベキューしたり。来年は持ち上がりだから、余計に仲良くしなきやつて氣もしたりする。

この週末も、何人かで風呂入りに行く約束していた。

「さつき、授業中にさあ・・・」

と、オレが弁当を広げながら、クラスのヤツにエイコの話をしようとした矢先・・・例のカノジョが、オレの視界の中に、突然現れた。ヤバ・・・とつそに、口をつぐんで視線を落とす。き、気が付きませんように・・・けど、カノジョは真っ直ぐにコチラに向かって歩いてくる。あー、オレらの前で立ち止まって・・・ヒィイ。

「ノリ、かくまつて！」

「なにい、ミナミビウしたのー、もしかして・・・アイツ？」

「そつ！いい？」

隣でメシを食っていたクラスのノリに、カノジョは後ろを気にしながら拝むように頼んだ。

オレなんてまるで眼中にないかのように、急いで流水の後ろに身を潜めていた。それを更に隠すかのように、オレらがガードするわけね、納得です。

「田辺え、もう少し後ろ下がってあげてよ。」

「ああ、うん。」

ノリはテキパキとクラスの連中に指示して、カノジョをかくまつ手はずを整えた・・・のが早いか・・・

出た！エイコ登場だー。

「ねー、田辺えーミナミ来なかつた？」

「はあ、だれ？」

エイコ、なんでオレなんだよ！オマーの知ってるヤツは他にいんだろ。高橋とかミキとかのが、知り合いなんじやねえの？クラスのヤツらの顔に、一瞬、緊張が走っていた。

オマエら、ちゃんとフォローしろよ！

「ウチのクラスの都築ミナミ、知ってるでしょ。一番キレイな子！」

「あー、髪、短くて背の高い子？」

少しイライラしたように腕組みしながら、エイコはオレらの顔を見回した。

もしかして、バレてるか？

「そう、じつち来なかつた？」

「いや、見てないけど……来たの見た、ノリ?」

オレがノリに振ったのが……まずかった?

ノリは、急に立ち上がり、エイコにツカツカツツと詰め寄った。

アララ・・・

「アンタさ、勘違いしてんじゃない?

ミナミが、アンタなんかにマジで興味持つわけないじゃん。

ミナミだつて迷惑してんだから、しつこく付きまとうの止めなつて。

」

なんですよ、そこまでノリが言わなくとも。

もしかして、いわくアリ?」の一人つて……怖えー。

「アンタに何がわかるの!ほつといてよ!…!

エイコは、キツとオレを睨んで……なんで、オレよ!

スゲー悔しそうにきびすを返すと、屋上から走り去った。

その場に異様な緊張感が漂う……うわあ、何よこの雰囲気……事情を知ってるらしい数人が、コソコソと何かを話していた。

「ミナミ、行つたよ。」

今さつきとはうつて変わつて、明るい口調でノリは言った。

「サンキュー、ノリ、助かつた。

もーをー、毎日、あんなじやん、キツイんだよねえ。トイレにも1人で行けないんだよ。

さつきの体育のときもさあ、ね、タナベくん?見てたでしょ、あんなだもん。

「う、うん・・・

どう、返答すればいいってんだよ!

カノジョはオレの隣にドカッと腰を下ろして、軽快に話をする。オレの氣ますさなど、お構い無しに。カノジョつてこんなキャラだつたんだ・・・そつちのがビックリ。

「ミナミ、エイコには気をつけた方がいいんじやん?」

「んー、わかつてる。」

「アタシはさあ、アンタのことわかつてゐつもりだけど、アイツは

わかつてないじゃん。」

「んー、出来れば・・・わからないで欲しいかな。」

アハハハって笑う数名の女子・・・なに、なに?やっぱわけアリなの?ちょっと気になつたりしてる。

ふつとカノジョが動いた時に薰つてきた紅茶のような香りが、オレの鼻腔をくすぐる。コロン?ほつとするよつな、そんな香りだつた。エイコもこの香り、嗅いでたんだな・・・さつき。

「ミナミ、お昼は?」

「あ・・・まだ・・・ノリい、ちょっと頂戴」

遠慮なく手を出してみせるところ、ちょっとカワイイかも。ホ力のクラスに混じつて昼メシ貰つつてのも、なんかオカシイかも。国立コースのくせに、この子、ちょっと変わつてるかも。

「しかたないなあ、オニギリ1個あげる。ほら、田辺えもカラアゲあげなよ。」

「う、うん、ハイ。」

「サンキュー、田辺くん。」

すっかり名前憶えられちゃつたつて?さつきまでの氣まずさが消えて、オレは案外居心地よく弁当を食べ始めた。すぐ隣にカノジョが座つても、なんか嬉しいし・・・ノリのお陰で知り合いになれたのも、ラッキーって感じ。

だって、オレ・・・前から少し気になつてたんだよね、この子のこと。

ボクコメ4

相変わらずハルキからは、メールが無かつた。なんだよ、もー。さつき、弁当の後に「なにしてるの?」ってメールしたのに・・・少しごらい、相手にしてくれたつていいじゃん。電話しちゃおうかな・・・でも、ウザいか?夜はバイトだし、今の時間ならいいよね。「田辺、オレら行くよー。」

「あ、オレ、電話してから行くから、先、行ってー。」

オレは、なんだか急にハルキに甘えたくなつて携帯に電話した。5回、「メールが続く・・・切ろうと思った矢先、大好きなハルキのちょっと擦れた低い声が返ってきた。近くに知り合いはないな・・・

・
「もしもし、リョウ?」

「うん、今、平気?」

「イイよ、どうした?」

久しぶりに聞いた声に、胸が熱くなる。だつて、我慢したんだもん、忙しいつて行つてたから。
だから、あんなやな夢まで見ちゃつてさ、妙に不安つていうか落ち着かなくてさあ。

「だつて、メールしても返事こないから・・・」

「ゴメンゴメン、教授が学会近くでさあ、その準備してんだ。メールは見てるよ。」

その言葉に嬉しくなつて、頬が自然にほころんでいた。メールは見ててくれる、それがわかつただけで満足なんだ、オレつて単純。「うん、わかつて、ちょっとハルキの声が聞きたかつただけ。」「週末、何してる?」

「えつと、土曜日はクラスのヤツらと風呂行こうつて約束してんだ。」

「じゃ、日曜日は空けとけよ。」

あー、失敗。約束入れるんじゃなかつた・・・でも、学校の友だちと遊ぶのも大事だ、つてハルキは言つてたもんな。オレが友だちと遊んだつて、オンナみたいにやきもちやかないし。

「うん、わかつた、またメールするね。」

「返事できなけれど、いいか?」

「読んでくれてるつてわかつたから・・・それじゃあ。」

「りょう。」

「ん?」

電話を切ろうとしたオレを呼び止めたその声に、身体がビクンと震えた。

「好きだよ。」

「うん、オレも。」

ああ、だからオレ、ハルキが好きなんだ。いつもは素つ氣無いくせに、自己中にしてるくせに、本当はスゲーオレのこととか気遣つてくれる。今、身体中、幸せ一杯。無意識に、フェンスをギュッと握り締め1人身悶えていた。

「ふーん、田辺くんは・・・ソッチOKなんだあ。」「え!」

背後からの急な声に、ビクつと身体が反応した。

だ、だれ?いや、だれって話じやない、カノジョだ!フェンスを握り締めていた手のひらが、ジットリと汗ばみ冷や汗が背中を流れ落ちる。恐る恐る、声の主の方へと振り返つた。

「ハイ、これ。さつき、オカズ食べちゃつたじやない?足りないでしょ、アレじや。だから、「レ食べてよ。」

「都築さん・・・」

「サンディッシュ、いらなかつたら捨てちやつて。」

「ずっと、聞いてた?」

「んー、電話?えつと、声が聞きたかった・・・つてあたりから。電話の声、漏れてたし。」

まったく悪びれる様子も無く微笑んでサンディッシュを手渡すと、わ

ざとらしくオレの隣でファンスに寄りかかった。このオンナ、何者？てか、バレた？オレがオトコと付き合ってるの・・・こめかみに、タラリと汗が流れた。

「ま、私も・・・そつち〇Kだからさ。」「え？」

「学校じゃ、ビアンだつて思われてるし、それもアリかなーって。」「バイなの？」

「そうかもね、よくわかんないけど。」

やっぱ、やっぱ、変、この子。オレが惹かれたのって、コレだつたのかもしんね。カノジョが持つてる、独特の匂いっていうか、いや自分と同じ匂いってやつ・・・人は見かけによらないってこのことね。

そんなことより、オレの秘密がバレちゃった・・・どうしたらいいの？

「なんか、不安？」

「だつて・・・」「

「そういう話つて、個人的なことじゅん。私みたいに、知られてるヤツもいるけど・・・その煩わしさつてわかつてるし。私を信用しろ、とは言わないけど。」

「うん・・・」

不安だよ、そりゃ。不安で胸が一杯。さつきまでの幸福感はどうやら、カノジョに、そうカノジョにバレたショックで、オレの頭の中パニック状態。

「ほらほらー、そんな捨て猫みたいな情けない顔しないの！..」

「え、今・・・なんて・・・」

「捨てられた仔猫みたいだよ、田辺くん。なんだつたら、拾つてあげようか？」

「うわあ――――、あの夢つて、これのこと？？」

すっかりパートしてるオレを面白そうに見つめて、カノジョは言った。夢の中と同じアーモンド型の眼が、じっとオレを見つめている。

でも、夢の人は絶対にオトコ、見間違えるはずもない・・・それに、声はもっと低かったもん。

「じゃ、エイコに見つかったみたいだから、行くね。」

2メートル先に、仁王立ちのエイコ発見。

ひどく誤解されてる気がするんですが・・・オレとカノジョは、まだなんの関係も無いぞ！

そう言つてやりたかっただけど、この口から出た言葉は・・・

「都築さん、放課後、ヒマ?」

「学習室にいるかな。」

カノジョは苦笑してそう言つと、エイコにがつちりと腕を取られて行つてしまつた。

なんか、スゲー嫌なオンナに捕まつてないか？カノジョ・・・可哀想に・・・なあ。

カノジョの不幸に同情しながら、エイコの強引さには笑うしかない。エイコに見つかったらコワイけど、オレは、もう少しカノジョと話してみたいと思っていた。

ボクコメ5

「放課後に」と、都築さんと約束はしたけれど、カノジョは学習室にはいなかつた。

代わりに、帰ろうとしたオレを校門で待っていたのは、あのエイコだった。

ついてねえー。

「田辺え、あんたミナミと何かあるわけ?」「あ?別にい。」

なんだコイツ、オレにまで嫉妬してるわけ?
オマエ、その勢でカノジョとしゃべったやつ全員に、イチャモンつけんのか?

これだから、オンナってヤなんだよ、見苦しそうだな。

「じゃあ、なんで放課後なわけ?」

「関係ねーだろ、オマエこそカノジョと何なんだよ。」
オレのその質問に、言葉に詰まつたエイコ。

視線を落として、小さくため息をつく。

やっぱ、恋してんだな、コイツも。

オレとエイコは、近くの公園へ向かって歩きだした。
ありえねー! チュエーションだったけど、エイコの心に付き合うのは中学からの縁だから。

「オマエ、カノジョが好きなの?」

「ダメ?」

「ダメじゃないけど・・・」

お嬢様でお姫様なエイコが見せた、その苦しげな恋の表情がオレの気持ちとカブる。

高飛車な態度で敵無しみたいなオマエでも、そんな顔するんだな。
少しばかり親近感も覚えたけど、それだけ。
同情はしないぞ。

「他のヤツとは違つて、ミナミは何が違つ……だから、つい……」

「ダレにも渡したくない！ってか？」

「そんな感じ。」

それって、ドツボにはまつてね？恋愛初心者みたいな……あー口イツもしかして……

自分以外の誰かを好きになったの、初めてとか？

「付き合つてんの？」

「……」

エイコはうつむいて、首を横に振つた。

恋の空回りつてヤツか。

好きな相手に振り向いてもらえないもどかしさ、とか
いつそのこと、嫌つてくれればいいのに……ってヤツ。
ありがち。

「他のオンナとしゃべつてんの見ただけで、チヨームカつくんだよね。」

「だからって……」

「わかつてるよ、でも、無視できないもん。」

あらら、重症。

カノジョもハツキリしてやればいいのに、こんな状態は苦しいだけでエイコが可哀想だ。

それをしないカノジョに責任がある、とオレは思った。

「私の事なんか、同じクラスの友だちとしか思つてない。」

「わかつてんじやん。」

「だけど、私の気持ちはどうすればいい？」

それをオレに訊くのかよ。

オレに訊かないで、直接カノジョに訊くべきなんじゃねーの？

そう思つたけれど、口には出さなかつた。

エイコの切なさが、オレにも十分理解できるから。

「こんなに好きになつたの、初めてなんだ。」

田辺えも知つてゐるでしょ、私の性格の悪わ。

自分じや変えられないけど、ミナミならえてくれる氣がして。

「恋するど、入つて変わらんだな・・・」

「え？」

「オマエ、ずいぶん変わつたじゃん。」

エイコはポカソと口を開けて、オレを見た。

なんだよ、自分が少し変わつたことに気が付いてねえのか？

しうがねえなあ、意外にドン臭いのな、オマエ。

「ま、ストーカーみたいな真似は止める事だな。

カノジョも迷惑だらうし、それにオマエ自身も傷つくんじゃね？」

「ストーカーなんて・・・」

「十分、ストーカー入つてゐつて。ヤベエつて思つたもん、お昼の時。」

「マジ？」

うなだれるエイコは、さつきまで自分自身を見失つていたんだ。
自分の中の欲求に突き動かされて、ソレに忠実に従つた結果がコレ。
気持ちに馬鹿正直すぎんだよ、オマエ。

「嫌われたよね、きつと。」

「どうかな。カノジョ、迷惑そつにはしてたけど、キライだとは言つてなかつたぞ。」

「ホント？」

「たぶん。本人に謝つて、ちゃんと訊いてみれば？」
立ち直り早えー。

うらやましいくらい、オレなんか夢にまで見ちゃうのに。
瞳を輝かせて、さつきとはうつてかわつた自信に満ちた、いつもの
エイコ。

もう少し、凹んでもらつたほうが良かつたかもしんね。

「田辺え、なんかゴメンね。」

「ま、エイコもさ、少し冷静に周りみたほうがいいぞ。」

「そうする。」

公園のベンチにオレを残し、

背筋を伸ばして颯爽と歩き出したエイコは、いつものお嬢様に戻つてこる。

「コイツはやつぱ、いりでなこと。

実際、オレはエイコをそんなにキライじゃないんだ。

周りがどんなに非難めいた事を言つても、コイツは揺るがない。自分を強く持てるのを、少なからずも羨ましく思つたりもするんだ。ただ、コイツの場合、その度が過ぎるつてのが反感を買つ種なんだけどね。

「そうだ、田辺え、マジでミナミとはどうなのよー。」

「なんだよ、疑つてんの? オレ、今日、初めてカノジョと話したんだぞ。」

「そ、ならイイわ。少しごらりなりトイから。でも、ミナミにひょつかい出さないでよ!」

いつになく意地悪い口調で言つたけれど、その顔はいつも以上に可愛らしく見えた。

恋のチカラつて、やつぱスゲーんだな。

底知れないパワーつての?『えてくれるんだもん・・・恐ろしいくらいい。

オレはノロノロと立ち上がり、一人、駅に向かつた。

そして、学校帰りの学生で溢れた駅前で、オレは自分の田を疑つた。

・・・コレも夢?

ボクユメ6

「ハルキ?」

あんなに忙しげで、まだ大学にいるはずじゃなかつた？
バイトだつて、7時からじやん。

目の前のコンビニかた出てきたハルキを見つけたオレは、
声を掛けることも忘れ、その場に立ち尽くした。
だつて・・・

『ハルキー、今日もウチ、泊まるの？』

『ダメ？』

『別にいいよ、誰も来ないし。』

え！？どういう事？もしかして、他人の空似？

でも、一緒に居るのつて・・・一緒にコンビニから出てきたのつて・

・

震える手で、携帯を握つた。

その二人の、後姿を見つめながら。

オレに背を向けて、目の前から遠ざかつて行く那人から、聞きな
れた着メロが流れてくる。

「もしもし、リョウ？」

「ハルキ、今、どこ？」

「んー、ちょっと外。」

携帯から、同じ雑踏が聞こえてくる。

近くを通つた、救急車の音まで。

「ん、わかつた、またね。」

事實を前に、震える指が一方的に携帯を切つた。

冷静な自分の声に、オレ自身が驚いている。

その事に気が付いたハルキが、周りを見回している。

ハルキに見つかる前に、この場を立ち去るしかないだろ、早く！

勝手に走り出した脚は、人込みの中へとオレを隠してくれた。

遠くで名前を呼ぶ声が微かに聞こえたけれど、今は何も聴きたくな
い。

手に握られた携帯は、電源を切るまでずっと鳴り続けていた。

なんで、なんで、カノジョなんだよ！－

惨めな気持ちを抱えていた。

エイコにあんなエラそうな事いった自分が、馬鹿みたいだ。
オレだつて、同じじやないか、同じ過ちを犯したじやないか・・・
エイコと別れた、公園のベンチにずっと座っている。
どこに逃げ込んだらいいかわからずに、たどり着いたのはココだつ
た。

電源を切った携帯は、ずっとオレの手の中に握られたまま。
届くはずの無いハルキからの連絡を待つていてるなんて、馬鹿だ。
好きだから、大好きだから・・・自分だけを見ていて欲しいから・・
・

だから、こんなに苦しくて切ない想いを胸に抱かなきゃならない。
ハルキ、アレはヒドイよ・・・マジで。

眼にした事実が、頭の中で何度も何度も繰り返されていた。
コンビにから出てきたハルキ、そしてカノジョ・・・都築さんが。
二人が知り合いだなんて、知らない。
カノジョの家に泊まつてた？

今日も、泊まるの？

・・・そうだ、親戚かなんか。

それをハルキに確かめるなんて・・・出来ないよ。
時間だけが、オレを残して過ぎていった。

公園の外灯が、ボンヤリと灯り始める。

ホント、何なんだよ・・・コレ、こんなのアリ?
遠くで・・・雷鳴が轟いていた。

こうして座つていたら・・・

この惨めな気持ちを、洗い流していくてくれるんだろうか?
「ねー、どうした、コネコちゃん。飼い主に捨てられた?」

え？

その声に顔を上げると、見たことのある・・・
澄んだアーモンド形の瞳が、田深にかぶつたキャップの下から覗いていた。

「きっと雨が降つてへる。『』にいたら濡れちゃうよ、良かつたらウチに来ない？」

どこで聞いた事のある、セリフ。

聞き覚えのある、涼やかな声。

その手が、オレの方へと伸びてきたけれど、とっさにその手を払いのけた。

差し伸べられた救いの手の甲に、赤く血が滲んだ。

「あ・・・」

「ん？ 大丈夫、このくらい。」

「ミシミシ。」、そう言つて、頭を優しく撫でるな。

でも・・・なんだろ？、この感覚。

冷え切つていた胸の中に、血が通つ感じ。

「誤解したまま、逃げ出すなよ。」

「・・・。」

オトコのような声で、話し方で、オトコのよつな身なりで。
いや、どう見たって、こいつ、オトコだ。

田深にかぶつたキャップ、洗いざらしのシャツ、汚れたジーンズ。

ちょっと人目を引くのは変わらないけれど、

今、目の前にいるのは、オレの知ってるカノジョじゃなかつた。

ボクコメフ

「オレとハルキは、前からダチなんだ。

ハルキはオレの良き理解者つてどこかな、わかるだろ。」

訳もわからずにいるのに、何をわかれつていうんだよ。オマエの言つてることを、鵜呑みにできるか。ムカついて無言のまま、その横顔を睨み付けた。

「わかんないか・・・んー、オレや、身体はオンナだけど、脳みそはオトコなわけ。

しつてるだろ、そういう人間がいるつてこと。テレビで見たこと無い？」

あるけど・・・あるけど、そんなのが近くに居るなんて想像できない。それに、オマエの言つてることが本当だつて事、どうやって立証すんだよ。そんな眼に見えない事、どうやってわかれつていうんだよ。

「信じらんないよね、こんな話し、いきなりだもんな。誓つて言つけど、オレはハルキとやつてないから、マジで。ダチと付き合つぼど、飢えてないし。第一ハルキは、オレのタイプじゃないしさあ。どつちかつていうと、田辺くんのがタイプ・・・あれ、それじゃダメ？」

なんだよ、コイツ、ちょ一訳わかんね！オレは、一体、何を信じたらいいんだよ。

雷鳴はどんどんとコツチに近づいてきてるようで、どんどんよりと曇った夜空が、とこねどいろ明るく光る。湿った風が、オレたちを吹きつけ始めた。

「参つたな・・・話しても、無駄つて感じ？」

「・・・ハルキは？」

「待つてるよ、ずっと。田辺くんが携帯の電源入れてくれるの。」手に握つたままの携帯に視線を落とす。なんか、ここで電源入れた

ら負けって気がしねえ？

「けつこー、頑固？」

「なんで、都築さんがココに来たの？」

「んー、誤解させた責任みたいのあるし、それに、仔猫ちゃんをほつとけないし。

極めつけは、ハルキの馬鹿がスゲー凹んじやつて・・・で、オレの出番かなつて。」

「なんだ？ あの血几中のハルキが・・・凹んどの？

こんなことぐらい、軽く笑つてんじやない、ハルキなら・・・

「アイツ、あれでもわー、マジ情けないくらいウサギちゃんなわけ。

「ウサギ？」

ヤツは、ニヤニヤと笑つた。オレがコネコなら、ハルキはウサギ？ なんだよソレ。

「そーだよ、1人だと寂しくて死んじゃうーみたいなヤツ。」「んなわけないじゃん！」

「知らないの？ アイツ、いつ田辺くんに捨てられるかつてビクビクしてんだから。」

ダレが本気にするかよ。

あのハルキが、捨てられるつてビビッてたなんてさ、笑えるじゃん。いつつもほつたらかしで、自分ばつか遊んでるくせに。

「今も、ひざ抱えて丸まつてんじやん？」

そんな情けないハルキ、ホントのハルキなわけないじゃん。何にもわかつてない、コイツ。

こんなヤツにハルキのこと、とやかく言われたくない。言わせない。

「アイツとなんか別れて、オレと付き合わない？」

「うつせーよ、なんだよオマエ、わつきから勝手なことばっか言つてんじやねーよ。」

「オレ、マジで言つてんだけど。」

そう言つたヤツの横顔は、うつとりするくらいキレイだつた。その真剣な瞳に吸い込まれそうになつたのは、認めてやる。オマエのこと、ちよつとは氣に入つてたのホントだし……あんなの田の前で見せ付けられるまでは、ホント機会があればって思つてた、けどだ！

オレは、オマエとハルキの関係が氣に入らないんだよ。

「エイコが感謝してた、田辺くんに助けられたつて。自分を見失つてたの、気が付いたつてさ。」

「エイコと話した？」

「さつき携帯で、「メンツ謝つてきた。オレもさ、友だち以上の気持ちは無いつて話をしなきゃいけなかつたんだけど、エイコが自分で気が付くの待つてたんだ。じゃないと、同じこと繰り返すだろ、あの手のオンナは。」

ヤツの真面目さつていうか、優しむに、素直に驚いていた。友だちに対し、そこまで真剣に思うだらか？ そこまで、相手のことを考へるだらうか？

フツーなら、ウザいぐらいで無視して終わる。好きでもない相手に言い寄られたら、尚更なんじゃね。

「オマエ、だからオレがココだつてわかつた？」

「まーねー、ハルキは今でもあちこち駆け回つてんじやね。放課後の約束、エイコぶつちすんのに、すっぽかしちやつたし。せつかく二人つきりで話すチャンス、オレが見逃すとでも思つ？ まさか、この格好で告白するなんて思つもよらなかつたけど、ま、いいかなつて。」

ええ・・・今、サラリと何か言つてない？ 結構、ドキドキしちゃうようなこと。

「コレつて夢？」

「オレ、寝てんの？」

「ハルキとのことは知らなかつたけど、結構前から、田辺くんを見てたんだから。

オレとしては、ハルキを持つてかれたーつていうのが正直な気持ち。

・・出遅れた。」

「な、なんでオレなの?」

「好きになるのに、理由が必要?」

ない・・・。好きになるのに、理由なんていらない。ハルキを好きなのに、理由なんてないもん。それと同じ気持ちを、コイツも抱いてる。

「ちょっとは脈アリだつて思つてたんだけどな、さっきのドシクつたね。」

「じゃ、本当にハルキとは・・・」

「だから、ただのトモダチ。今、大学が忙しいんだつて? バイトもしてるだろ、朝、間に合わないとかなんとか言つてた。ウチ、大学の近くなんだ、それで、泊めてやつてるだけなんだから、変に勘ぐるなよ。」

「そ、うなんだ・・・」

「話してなかつたハルキが悪いつて、オレ、ちゃんと叱つといったから。」

「うん・・・」

手の中で携帯を転がしながら、軽くなつた胸で楽に呼吸する。頬に、ポツリと小さな雨だれが落ちてきた。雷もずいぶん近くなつてゐる。

「ウチ、来なよ。その方が、ゆっくり仲直りできるし。」

「なんでそんな・・・」

「惚れた弱みつてやつ? 好きな子には幸せでいて欲しいじゃん。」

「マジ?」

「マジで。」

ヤツは素早くオレの手の中の携帯を奪い取つて、電源を入れた。途端、鳴り響く着メロ。

「ほーらね、ウサギちゃんビクビクでしょ?」

「ホントだ。」

「やつと笑つた。」

「・・・。」

「早く出な。」

都築さんから受け取つた携帯は、まるでハルキが泣いてるみたいに鳴つてゐる。

「もしもしし・・・」

「リョウウーー今、どう?」

「公園。」

「あ、」

都築さんは、急にオレの手から携帯を取り上げた。

「いいか、これ以上泣かせたら許さないからな、今からウチに連れてくから大人しく待つてろ!」

そうハルキに怒鳴つて勝手に切ると、携帯をポイと投げて寄こした。

「アイツにはイイ薬。」

「もー。」

参つた。

この人にはかなわないかも・・・マジ、参つたね。

エイコがカノジョは違つて言つた意味、わかつた気がする。そんな、カノジョに惹かれる気持ちも。まだ、カノジョの正体すら知らないけど、こうしているうちにずいぶん惹かれてるもんな。学校のカノジョとは違う、もう一人のカノジョの方に。

あの時の夢が、まさかこんな形で本當になるなんて、まさに正夢。

「行こ、ウサギちゃんが拗ねる前に。」

意地悪く笑うカノジョにつられ、オレもニヤリと笑みをこぼす。

そして、オレらの大きな笑い声は、誰も居ない夜の公園に響いた。

きっと、今夜もまた、オレは夢を見る。

それが悪夢にならないことを、今から願つておいつ。

「ボクは夢を見る」（終）

ボクユメフ（後書き）

「ボクは夢を見る」を拝読いただき、ありがとうございました。
ムーンライトノベルズBL系にて「久保トオル」が引き継ぎいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2146a/>

ボクは夢を見る

2010年11月11日07時42分発行